

## 12月の自然を語る会

アニマルウェルフェアについて

12月18日(土)10:00~12:00

講師：岡田千尋さん（アニマルライツセンター代表理事）

Zoom と飯田橋ボランティアセンター

参加者 17名（リアル参加を含む）

まずアニマルライツとアニマルウェルフェアの違いについて。アニマルライツとは言葉通り動物が動物らしく生きるための権利ということだ。それに対してアニマルウェルフェアは、人間に利用される動物の福祉に焦点を当てている。つまり家畜や動物園の生きものたち、医学の実験に使用される動物たちの生きる環境をよりよくしていこうというものなのだ。今回はアニマルウェルフェアの観点からお話があった。

例えばニワトリでは、止まり木にとまる（外敵を警戒）、砂浴びをする（寄生虫を取るなど）、餌は地面をつついて採るなどの習性がある。そのようなことを自由にさせてもらえたニワトリとケージ飼いのニワトリでは足の骨の太さもかなり違ってくることがわかっている。現在までの日本の養鶏はほとんどがケージ飼いで、密な状況での飼育から、鶏肉の半数はサルモネラ菌を保有しており、その値は他国よりもかなり高い。しかし日本でもケージ飼育廃止がスタンダードになりつつあり、欧米では半数以上がケージフリーとなっている。平飼い卵も手に入れやすくなってきている。

畜産では、屠畜のしかたも問題になる。日本では気絶させずに行うやり方だが、これは国際社会では許容されなくなってきている。アニマルウェルフェアは世界では高める傾向に移行しているが、その点日本はかなり遅れていると言える。アニマルウェルフェアが急速に進んでいる背景としては、動物虐待を見て見ぬふりをすべきではないということと同時に、動物の健康は人間の健康にもつながり、持続可能な社会を作るという事が挙げられる。集約的な飼育、3密である工場畜産ではウイルスが急速に進化し、人間への感染にもつながっていくのだ。自然の健康、動物の健康、人間の健康はすべてつながっている、OneHealth（ワンヘルス）なのだ。

動物の飼育のために多くの森林が失われていく。世界の農地の75~80%が家畜の飼料の生産のために使われているのに対し、家畜から我々が得ているカロリーは18%にしか過ぎないそうだ。逆に、畜産動物が起源の地球温暖化ガスは全体の14.5%、これは交通機関の排出量よりも大きいとか。肉食は今や気候変動の大きな要因となっているようだ。むやみに肉を食べることを慎む、そのような生き方を模索していかななくてはならない。

（文責：小川）